

氏名	橋 川 喜美代
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第3795号
学位授与年月日	平成12年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者
学 位 論 文 名	幼稚園におけるカリキュラムの発展過程と保育形態の変容に関する方法的 研究
論文審査委員	主 査 教 授 豊田ひさき      副主査 教 授 堀内 達夫 副主査 教 授 金児 暁嗣

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は3部構成。1部において、保育形態の変容過程を明らかにする準備作業として、1830年前後から80年代頃までのフレーベル主義幼稚園の受容期に見られる一斉画一的指導形態の実際を明らかにした。その作業を、アメリカでは保育形態変容の端緒ともいえるべき無償幼稚園、わが国では女子高等師範学校附属幼稚園「分室」と二葉幼稚園の保育実践との比較を通して行った。

第2部の1890年から1910年代は、アメリカでは、フレーベルの著作からでなく眼前の子どもから研究を始めた保育者たちの模索期である。ここでは、ホールら児童研究運動家やデューイら進歩主義者達が進めていく科学的手法に立脚したカリキュラム開発と実験の展開に焦点を当てた。わが国では、和田実等が進めようとした東京女子高等師範学校附属幼稚園を中心とした改革の動向を、A.L.ハウが頌栄保姆伝習所と附属幼稚園において展開したシカゴ式保育形態、進歩派の影響を受けた広島英和女学校附属幼稚園や奈良女子高等師範学校附属幼稚園主事森川正雄が提唱した「自由細目」と比較検討することによって、アメリカの幼稚園改革運動との相違点を浮き彫りにした。この時期、わが国では、アメリカの保育形態を学びながらも、それとは異なる独自の形態が模索されていたことが明らかになった。

第3部では、フレーベル主義保守派と進歩派との論争を終結させたアメリカの幼稚園教育が求める方向性を、「効率化原理」を最大限に押し出すカリキュラムと、「子ども中心主義」を求めるカリキュラムを比較・考察し、その相違点を浮き彫りにした。わが国の幼稚園では、コロンビア大学ディチャーズ・カレッジ実験学校での実践を学んだ倉橋惣三が自園において改良した保育実践を考察した。倉橋が求めた誘導保育と生活形態の神髄は、保育者の生活に引き付けられ、知らず知らずのうちに展開される子ども達の相互生活にあったと考えられる。わが国の幼稚園におけるカリキュラムと保育形態は、アメリカ直輸入のモザイク的受容に始まり、中村五六が驚嘆した子どもの自由遊び場面での保育者の観察記録を契機に大きく変容していく。倉橋惣三が「いかなる形態が幼稚園というものの真の生活形態」なのかと問い続けた生活形態は、誘導保育案を含む系統的保育案によって完成される。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

幼稚園教育の発展過程は、これまで主として思想史、制度史、あるいは各国史研究として進められてきた。本論文はこうした中であって、保育形態（精確には保育活動形態）に着目し、保育実践のレベルにまで降りてカリキュラムとその保育形態がどのように変容・発展してきたのかを日米の比較をとして、実証

的に究明しようとしたものである。日米とも、幼稚園のカリキュラムは、フレーベル主義幼稚園の受容期に見られる一斉画一的な指導形態の改革を通して開発が進められていく。改革の契機となったのが、幼稚園が一般大衆、とりわけ貧しい階層にまで拡大される過程において、その保育内容・方法の改良のみならず、保育形態の変容までが起こってくる。本論文は、保育形態の変容が、何故、対象児の拡大や内容・方法の改良と同時に始まったのかという問いに対して、保育者に子どもの反応や行動を受容し、子どもの心の動きに共感・共有しようとする姿勢・態度を要求する「子どもの発見」があったという事を、実証的に解明することに成功している。まずここに、教育方法学的研究の核心を突いた本論文の独創性が認められる。以下、本論文の構成にしたがって、審査結果の要旨を略述する。

第1部第1章で、アメリカにフレーベル主義幼稚園が受容される前提が既に19世紀前半に用意されていた事を述べ、第2章で、フレーベル主義遵守による象徴主義が一斉画一的な指導形態に繋がっていく事実を、アメリカ人とドイツ人教師による恩物教授法との比較から丹念に探り出している。第3章では、1870年代中頃から全米に普及する無償幼稚園の保育実践を分析して、作業中心の労働教育型、遊び中心の保護施設型、遊びと労働をミックスした人間教育型の3類型を抽出した上で、勝手気儘で粗野な貧児の反応や行動が、旧来の上から教え込む保育形態を子ども本位へと転換させる契機となった事を実証している点は、説得的である。第4章では、わが国に眼を転じ、東京女子師範学校附属幼稚園の実践を分析し、主任保母松野クララが目指そうとした遊び・労働中心の保育が、日本人指導者によって一斉画一性指導形態による恩物中心の知育偏重保育へと変質していく過程を具体的に明らかにしている。第5章では、勝手気儘でパワー溢れる貧児の行動に戸惑いながらも、そこに秘められた創造性や自主性の萌芽を見い出していく保育者の変容を描き出し、それが子ども本位の保育へと転換せざるをえない契機になったことを証明している。第6章では、中村五六の保育記録をはじめ多数の実践記録を分析して、遊びの中で展開される楽しさが、恩物による一斉画一的な指導形態の導入によって見失われてきた子どもを身近な者として保育者が受け入れていく契機になった事を突き止めている。第5・6章で、アメリカに見られる変化の兆しと約25年遅れて生じたわが国のそれが同型と指摘した事は重要である。

第2部第7章では、1893年のシカゴ博覧会で紹介されたペスタロッチ・フレーベル・ハウスの保育に触発されて、アメリカでは幼稚園を遊びと家事労働に基礎付けられた家庭的な共同体にし、子どもを実生活に活発に参加させていこうとする保育実践が拡大していく過程を明らかにしている。第8章では、ヘルバルト学派、児童研究家、進歩主義者の理論に影響されて開発されたカリキュラムを、①教師の指導性が強い中心統合主義保育、②指導意図が不明確になる自由遊戯主義保育、③子どもを取り巻く実生活に参加させるデューイ・スクール主義保育の3種類に分類している。この分類・整理は明確で説得的である。第9章で再び眼をわが国に転じ、恩物による手工を練習的遊戯の一つとして位置づけた和田実の実践を検討し、また各地の保育記録の分析を通して、子どもを取り巻く環境に応じた幼稚園づくりを目指す動きが出てきたことを突き止めている。これらの動きから、恩物至上主義的な保育からの脱却と、諸外国や都会の幼稚園を真似る段階から脱皮する兆しを探り出している。これらの動向に対して、第10章で、アメリカ人宣教師ハウが人格の統一を目指す保母養成で巻返しをはかるが、それはわが国では十分に理解されず、むしろ自由遊びの教育的価値を認識させる契機へと変質していったという指摘も注目に値する。第11章では、プロジェクト・メソッドを導入した実践を検討し、この実践が一定の成果を収めつつも、科学的な手法による児童研究が具体的な実践場面において十分に生かしきれない保母の苦悩があった事実をも解明している点は、評価できる。以上第2部の第7～11章で、日米を通じて、1890～1910年代はフレーベルの著作からではなく眼前の子どもから研究を始めた保育者達の模索期であることを確定し、わが国では、アメリカの保

育形態に学びながらも、それとは異なった独自の形態が模索され始めた事を突き止めていく作業は、緻密で説得的である。

第3部第12章で、1910年代以降に開発されたカリキュラムの例としてシカゴ大学附属幼稚園の実践を分析し、そこでは教育効率を上げるために子どもの食欲をそそる味付けも辞さない教師が出現した事を突き止めている。第13章では、「コンダクト・カリキュラム」の実践例を検討し、園生活を通して子どもの生活を完成させるという理念が「効率性」によって歪められていった過程を暴きだしている。第14章では、1910年代に開校された「プレイ・スクール」と「保育学校」を対象に事例研究を行っている。この事例分析を通して、教師が教材や素材に潜む学習への可能性と発展性を読み取り、子どもの興味や知的好奇心を触発する事によって、子ども自ら歩ませていく知性的経験の構造化が可能になり、子どもの言動や想いに潜む揺らぎや矛盾に共感しながら、子どもの深層のエネルギーをモノを介して表現させ、個性的に解放していく過程を明らかにしている。これは今日注目されている「癒しの教育」の萌芽と解釈できる。またこの事例分析では、一人の子どもが固有名詞で登場し、その子を巡る友達や教師との人間関係の変容・発展過程が追跡されている。アメリカでこの種の実践記録が登場してきた事は、教師が常に子ども集団関係にも働き掛けていく事を明確に意識し出した事実を傍証する興味深い成果である。第15章では、及川平治の「生活による保育」を分析し、それがコロンビア大学実験学校の影響を受けたものである事を明らかにしている。保育者のリサーチを強調する彼のカリキュラムは、目指すべきねらいを明確にすると共に、彼女達が自らの関わりを子どもの側から省察する眼差しを確立していった過程であるとする指摘は、保育者養成の点から見ても高く評価できる。第16章では、「家なき幼稚園」の保育記録を分析し、教師然とした冷たい眼で子どもを管理し、彼らと一緒に遊ぼうとしなかった従来の保母と子どもとの溝を埋合わせる一つの契機となった事を明らかにしている。第16章では、倉橋惣三が東京女子師範附属幼稚園の保母達と共に創り出した実践を分析している。生き生きとした生活を子どもに願う保母は、自ら子ども時代に楽しんだ遊びを保育活動の核とし、子どもの活動に一つの纏まりをつける。自らの楽しかった過去の思い出に引きずられ、期せずして子どもが生活する前に生活し始めた保母の姿は、子ども達を活動へと誘い込み、子ども相互の生活を展開させ、やがてそうした活動は子ども独自の活動へと変化・発展させられていくところに、「誘導保育案」の特質がある事を解明しつつ、アメリカでは実現し得なかったわが国独自の指導形態が誕生した過程を実証して行く緻密な作業は、明解で大いに評価できる。

終章では、各章ごとの保育実践に見られる保育者の教育要求と子ども達の活動要求の緊張・調整構造を保育実践のダイナミズムとして描き出す事によって、保育実践の構造化を試みている。こうした構造化によって、教師主導の一斉画一的指導形態から子ども中心の生活形態への変容は、保育者が子どもの中に身を置き、子どもを見守る中で、主体と対象との間に歴然とあった距離を接近させ、相互理解を深めつつ、教育（保育）活動の個性化を実現していく過程であるという原則を抽出している。この試みは独創的で、抽出された原則は、幼稚園に止まらず、初等教育、今日の言葉で言えば義務教育段階にも通底する「教えること」と「学ぶこと」との相互関係の有り様とその変容・発展の究明という教育方法学分野の中心課題の研究の深化に寄与するものと思われる。本研究全体は、日米における豊富な実践的資料を駆使した緻密な比較史的分析によって貫かれており、保育指導理論の発展と保育実践の発展過程の相互規定性を実証する事に成功している点は、今後の教育学研究の発展・深化に寄与するものと認められる。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。